

医療的ケア児と「バリアー」探る

医療的ケアが必要な子どもたちの体験格差をどう減らすか。福祉や介護を学ぶ大学生が7月、ケアが必要な子どもとテーマパークへ一緒に行き、考えた。参加した学生は、学び、感じたことを発信し、「誰もが楽しめ、あきらめなくていい社会」につなげたいと意気込む。

福祉や介護学ぶ学生 テーマパークに同行



大学生と医療的ケア児と一緒にユニバーサル・スタジオ・ジャパンを楽しんだ

大学生が考えた、意思疎通を図るボード「いすれ」も大阪人間科学大学提供



今回は、府と包括連携協定を結ぶユニバーサル・スタジオ・ジャパン(USJ、大阪市此花区)が学生の学ぶ場を提供した。

「ハード面と周囲の配慮 体験格差埋める」

府によると、府内の医療的ケア(人工呼吸器による呼吸管理、たんの吸引など)が必要な子どもは2020年の調査で1757人だった。増加傾向にあり、体験格差をどうなくすかが課題だという。

課題の解決に向け、府と事業連携をしている大阪人間科学大(摂津市)と摂南大(寝屋川市)で福祉や介護を学ぶ学生約30人が考えた。

このうち、大阪人間科学大の学生たちは5月に医療的ケア児と対面。どのようなことをしたいかなどを聞き、医療機器や食事のこななどを学んだ。5、6人でグループをつくり、園内にある車いすで使いやすいトイレや飲食、休憩できる場所などを調べた。下見もして、子どもの特性にあった当日の行動計画をつくった。

大阪人間科学大3回生の羽田彩愛さんがリーダーを務めたグループは、言葉で意思を表すのが難しい子どもと意思疎通できるよう、コミュニケーションボードを用意した。「暑い?」「眠い?」「休

憩」などと絵や文字をかけたボードを指さしてもらうことで、意思疎通に役立った。

また、医療的ケア児は体温調節が難しいことも多く、体温が上がった時に行ける場所の確保などにも注意して計画を立てた。

医療的ケア児が使う車いすはサイズが大きい。トイレなども入り口の幅などに余裕がないと使いづらく、医療処置ができる場所が必要ことや、医療機器に必要なバッテリーを充電する電源の確保が重要なことなど様々な課題が見えたという。

これまで羽田さんは、医療的ケア児と関わったことはなかったという。電車内でもたんの吸引などが必要ながあり、周囲の人の理解が不可欠だと感じた。「ハード面のバリアフリーも大切だが、周りの人の意識を変えるのも大切。ちょっとした体験が外出のバリアーとなっており、小さな配慮の積み重ねが、体験格差を埋めることにつながるのでは」と話す。

大阪人間科学大では、この秋以降も学生が他のテーマパークに行くなどし、社会にある課題を学ぶ。来年3月には報告書をつくり、医療的ケア児の体験格差をなくす一助になればという。(前田智)